

生命を得る。教会はただ言葉を語るのではなく、福音を生きることを学ばねばならない。すなわち、福音に生きることによって、教会の語ることは力をもち、生命を持つのである。

さらに古くして新しい問いである福音と律法についてボンヘッファーは独自な見解を述べている。彼は今日のわれわれの状況に極めてふさわしい新しい仕方、福音と律法の正しい区別をなしている。彼は二つの領域があるのではなく、キリストの現実化のただ一つの領域が存在するのであり、そこにおいて神の現実と世界の現実とは結ばれているのであると主張する。

「キリストにおいて、神の現実がこの世界の現実の中に入って来たように、キリスト教的なものはこの世的なものにおける以外のところには存在せず“超自然的なもの”はただ自然的なものにおいて、聖なるものはただ俗なるものにおいて、啓示的なものはただ理性的なものにおいてのみ存在する¹⁹⁾」

しかし、ボンヘッファーはさらに言を継いで、「しかしキリスト教的なものはこの世的なものと同じではなく、自然的なものは超自然的なもの、啓示的なものは理性的なものと同じではない。むしろ両者の間には、ただキリストの現実においてのみ、すなわち、この究極の現実を信じることにのみ与えられる一致が存在している²⁰⁾」というのである。

ボンヘッファーはこの世的なもの、キリスト教的なもの、静的ではなく論争的な一致を指示している。かくして両者の共通の現実を証し、キリストにおける現実においての一致を証しているのである。

現代の人間にとっては、パウロの手紙の中で割礼に関する論争によって提示されている律法の問題は、まさに宗教の問題である。パウロはユダヤ教の律法主義と戦った。ルターもまた十六世紀の教会を破壊に陥れかねない業による救いという教説と戦うという同じ努力をしたのである。ボンヘッファーは自分の見解を手紙の中に次のように

記している。

「割礼が義認の条件かどうか、というパウロの議論は、わたしには、今日のことばで言うならば、宗教は救いの条件かどうか、ということだと思われる。割礼からの自由はまた、宗教からの自由である²¹⁾」。

ボンヘッファーにとって、宗教は神のために備えられた人間存在の境にある空間である。宗教的人間は、人間の知覚の最後において、あるいは人間の努力の尽きた所でのみ、神について語る、と彼は指摘する。そしてボンヘッファーは、人間のギャップを埋めてくれる方としての神概念を拒否するのである。彼は神を *Deus ex machina* (機械仕掛けの神) として用いることに反対する。このことは彼のすべての神学的著作の中で一貫してなされている主張であり、十字架の倫理としての『倫理学』の関心でもある。ボンヘッファーにとって、十字架の倫理とは、律法と福音を区別する倫理である。彼は究極以前のもの、と究極のもの、律法と福音、世界と神とを区別する。しかもそこには二つの現実があるのではなく、唯一つの現実があるのであり、それはキリストにおいてこの世の現実に明らかにされた神の現実である。

律法と福音との相違を認識し、しかも両者に現実性を与える唯一の神の統一を知る者として、ボンヘッファーはパウロやルターと同じ線上に立っている。しかし、あたかも神なきかの如くに生きねばならない成人せる世界の状況の中で、神の要求を認めることによって、ボンヘッファーはわれわれの時代に対する十字架の倫理を正確さと情熱をこめて叙述する可能性を開くという新しい仕方、でその課題と取り組んだのである。

ゴッドシーの次の言葉は、ボンヘッファーの特色と意義を最も適確に表現したものの一つであると言うことが出来るであろう。

「ディートリッヒ・ボンヘッファーに関して、最も印象的なことは、彼自身の生涯が彼の神学の注解を提供しているということである。彼は神に近く、そして神に深く係わりながら生き、自由の

19) Ethik, S. 211.

20) Ibid., S. 211-212.

21) Dietrich Bonhoeffer : Letters and Papers from Prison. p 281.